緋弾のアリア～負完全な転生者～

クロス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア～負完全な転生者～

【Ｎコード】
Ｎ２５２６Ｚ

【作者名】
クロス

【あらすじ】
もといた世界を大嘘憑きの誤作動で虚構してしまった球磨川禊はなぜか大嘘憑き（オールフィクション）の能力が変に使われて緋弾のアリアの世界に転生することになった。そこで球磨川は武偵神崎・Ｈ・アリアたちに出会い共に戦ったりしたりする

序章　～転生～（前書き）

書きたかったから書いてみました。

序章　～転生～

序章　　～転生～

「おい、主起きんか！起きろといったら起きんか！！」

『お母さん後五分…』

「ワシャお母さんじゃないわ」眼を開けてみると目の前にサンタさんみたいな容姿のおっさんがいた

『じゃあどちら様？』

「わしゃ神様じゃ」どうせ神様出てくるんだったら可愛い女神だったらよかったのに

「失礼なこと考えるなぁ」どうやら自称神様（笑）は心を読めるようだ

「自称じゃないれっきとした神様じゃ」

『じゃあ神様僕が死んだんだったら、大嘘憑き（オールフィクション）で生き返るはずなんだけど』

「残念ながらその大嘘憑き（オールフィクション）の誤作動のようで主のいた世界が虚構されたんじゃよ。」

『じゃあなんで僕がここにいるの？』

「大嘘憑(オールフィクション)きの能力が変に使われて転生するようじゃよ」

『じゃあ、めだかちゃん達は死んじゃったの？』

「……」自称神様（笑）が黙ったということは死んだのだろう

『どこに転生するの？いちご１００％？それともＴｏＬｏｖｅる？』

「いや、緋弾のアリアじゃ」

『緋弾のアリアってあのラノベの？』

「そうじゃ、それで危ないから武器をやろうどんなのがいい？」よかったあたりだ

『じゃあ威力の高い銃二丁で』

「威力が高かったらそのぶん反動が重いぞ」

『大丈夫、反動を虚構(なかったこと)するから』

「じゃあ、パイファー・ツェリスカ二丁でいいか」そのパイファーなんとかを渡してきた

『うん、ありがとう。あ、あと学校は東京武偵高で学年とクラスは、キンジ君達と同じ2年Ａ組でよろしく』

「わかった。そうしておこう。あ、あと履歴は適当にたててておいた

から、一応書類を渡しておこう」書類を渡してきた

一般高からの転校生だって、しかも学力が低すぎる失礼だなぁ

『後ネジもちょうだい』

「ほい、あと、緋弾のアリアに関しての記憶を消しておくからの」

ネジを渡してそういった

『まあ仕方ないよね、ネジありがとう。この学ランのままでいられるようにしてよ』

「しょうがないその学ランを防弾にしといて、あとは主だけ特別ということにしておこうかのう。家については書類にかいておいたからのう」

「そろそろ時間じゃ。くれぐれも世界を虚構せんでくれよ」

『楽しみだなぁ』そう言ったところで真っ暗になり意識がぶっ飛んだ

「……さらばじゃ球磨川禊」

第一弾　～学校までの出来事～（前書き）

球磨川さんは一応性格を戦挙後能力が戦挙前ということにしといてくださいｍ（　　）ｍ

第一弾　～学校までの出来事～

第一弾　～学校までの出来事～

『転生できたのかな？』回りを見渡すと道路の真ん中にいた

『ここどこ？とりあえず書類を読んでみよう』手に持っていた書類を見ると

主の行くことになる学校は辺りに見える学校じゃとか書いている

『……辺りにって…ここ体育倉庫の中なんだけど……』とりあえず外に出てみると

『あれ？こっちに何か飛んできてる？』紙飛行機みたいなのが飛んできたしばらく見てみると

『うわ！パラグライダーだし人が乗ってる！』とりあえず体育倉庫に戻るとそれもついてきてしまった

『ど、どうしようういきなりピンチだ』とりあえず横に移動するとドシャーン、と音をたてパラグライダーが墜落した

『…まあいいや、僕には関係ないし。そんなことよりも学校にいかなきゃ。』

体育倉庫から出てさっき見えた学校みたいな建物の方に歩いていった

『あれが学校じゃなかったらどうしよう。記憶を消されたせいで位置がわからないじゃないか』

自称神様（笑）についての愚痴を言いながら歩いていると、何か変な乗り物が１０台きた

『この世界って変な乗り物があるんだなぁ。』そういうといきなり変なのについていた銃が発砲した

『え！？』

銃弾にいきなり頭を貫かれて死んだ。するとすぐに大嘘憑きが発動して死んだという事実を虚構（なかったこと）されて生き返った。

『すごく痛い。とりあえず体育倉庫に逃げよう』

走って体育倉庫に戻ると、途中にまた撃たれて死んで生き返った。

『そういや僕も銃を持っているんだった』

そう言って学ランのポケットの中からパイファーなんとか（以後パイファー）を取り出した。

『反動が大きいんだったっけ？大嘘憑きで反動を虚構（なかったこと）しなきゃ』

パイファーを構えて撃った。ドガァーン、すると一台の変な乗り物がスクラップになった。

『自称神様（笑）のいった通り凄い威力だ……こんなの二丁撃った

ら最強じゃね？』

この後何回も逃げて死んで生き返って逃げながら撃って壊してを続けて残り三台になった。

体育倉庫の敷地への曲がり角のある前を見ると変な乗り物が五台こちらに向かって来ていた

『とりあえず数を減らさなくちゃ』そう言ってパイファーをもう一丁を取り出して両方で撃った

遠くて慣れてなかったから一発外したがもう片方が当たりスクラップにした。そして体育倉庫の中に向かって走った

（いったい何回死んだんだろう）

考えながら体育倉庫の中に入った。すると……跳び箱の中に銃を変な乗り物に向かって構えている女の子かがいた

「さっきからの銃声はあんたね？あんたも手伝いなさい！」ピンクのツインテールが言ってきた

『えー、せっかく逃げてきたのに？』嫌そうにいった

「その学ランあんた一般生？」

『今日から僕も武偵だよ』

「じゃあなんで防弾制服着てないのよ！」

『大丈夫、この学ラン防弾だから』

「なら戦えるわね。ちょっとあんたも戦いなさいよ！」一緒に跳び箱の中に入っていた男の人に言っていた

『君たち武偵なの？もしそうだとしたらもう始業式始まってると思うんだけど？』二人に言ってみたら

「「武偵殺しに巻き込まれたんだ（のよ）！」」二人ともハモって言った

『早くあれやってよ。さっきからついてくるんだ』

「だからあんたも手伝いなさい！」銃で撃ちながら言ってきた

『この距離じゃあ弾の無駄になっちゃうよ』

するとさっきまで跳び箱の中に入っていた男の人が女の子をお姫様だっこをして出ていきなり変な乗り物に向かって銃を撃った。

すると7台の変な乗り物が壊れた。

（そんなことするんだったらはじめからやってくれたらいいのに）そう考えているとまた銃弾が頭を貫いて、また死んで生き返ったそれを見ていた女の子が驚いていた。

「あ、あんた今頭銃弾が貫いて……血が…なんで生きてんのよ」震える声で言ってきた

『えーと、壊してもらったし行こっと』走って逃げた

「ちょっと教えなさいよ！」その声を聞いたあともう聞こえなくなった。

第二弾　～転校～（前書き）

一応緋弾のアリアに関しての記憶を消されたので、２年Ａ組にして
と言ったのは覚えていません

第二弾　～転校～

第二弾　～転校～

あのあと遅刻して始業式に出た。一人だけ服が違うから変な目で見られた。

始業式のあとに教務科といわれる場所に行った。そこで跳び箱の中に入っていた女の子がいた。

「あ、アンタさっきのマジシャンなんでこんなところに」

『マジシャン？まあ今日から僕も武偵？になるからねえ、ここにいるのは当然だよ』

「あら、神崎さんと知り合いだったの？よかったわ球磨川君が一人ボッチにならなくて」

『いや、今朝にあっただけです。』

「私の前であんなことしておいてよく会っただけって言えるわね」誤解を招く言い方をするなんてひどい

「あんなことしておいて？なにをしたんですか？」先生も食いついてこなくていいのに

『いや、なにもしてませんよ』

「いっぱい出してた（血を）」いいかげんに誤解を招く言い方をやめてくれないかな

「球磨川君ちょっと話さなくてはいけないようですね」

『先生誤解ですよ。出したのは血ですよ変なものは一度も出してません』

「そうですか。まあいいでしょう。さあ行きましょうか」

そういうやり取りをして先生と共に割り振られたクラスの2年A組の前に来た。

「入ってきてと言うまでそこで待っててね。」先生が言ってきた

「アンタどうやってあんなマジックしたの？頭貫かれたように錯覚させてしかも上手に血も出すなんて」

『えーと、たねは教えられないよ』適当に返事をしといた

「アンタ一般高からの転校生でしょ銃は何を使ってんのよ？」

『確かパイファー・ツェリスカ？って名前だったと思うよ。それを二丁』

「パイファー・ツェリスカって一番威力の高い拳銃じゃないのよ。威力の高い銃はそのぶん反動が大きいのよ。それを二丁ってあんたの細腕じゃあ無理よ」

『でも実際にそれで変なのを何台か壊したよ』正直に答えてみた

「嘘よそれだったら逃げてこないもの」もういいやめんどくさいし
「はい二人とも入ってきて」入ってきてといわれたので僕たちは会話を止めて入った。
先にアリアちゃんが自己紹介とベルトの返却をしてその後の騒ぎがおさまってから自己紹介をした
『はじめまして。星雲高校から転校してきた球磨川禊です。まだ学科は決めてませんこれからよろしく』
みんなが括弧？なんで学ラン？とか言っていた。
「球磨川君は神崎さんのようにリクエストとかない？」
『特にありません』
「じゃあ峰さんの隣の空いてる席に座って」先生が指を指した席に座った
『よろしく。りこりん？』さっき自分でいってたからたぶんあってるだろう
「えーと、禊だから…、みそぎんだ！よろしくみそぎん」変なあだ名がついてしまった。
休憩間時間に質問攻めにあった。
「なんで学ランなの？」『一応防弾だし、学ランがよかったから』

「なんで括弧？」『括弧つけたいから』

「学科は何にするの？」『まだ決めてないって』

「部活はするの？」『するきなんてないよ。』

このような質問攻めに会った後すぐに学校が終わって神様に渡された書類に書かれている家についた。一応もう一人住人がいるようだからチャイムを押した。

ピンポーン……あれ？出ないからもう一度押してみた。ピンポーン　ガチャっ

「誰だよ」中から今朝に跳び箱の中に入っていた男。確かキンジ君が出てきた。

『えーと、君が同居人だよね。これからよろしくキンジ君』

「ああ、転校生の……確か球磨川だったっけ同居人が来るって言ってたけどお前のことだったのか。まあ入れよ」

部屋に入った。

第二弾　～転校～（後書き）

うーん、球磨川さんのキャラ崩壊の予感が！？

第三弾　～アリア来襲～（前書き）

うーん、塾にいくまでに急いで書いたせいか変になってる気が……
もし変になってたら感想のとこで指摘してください。編集で変えます

第三弾　～アリア来襲～

第三弾　～アリア来襲～

「そういえばお前宛に荷物が届いたぜ」

『僕宛に荷物？』この世界に来て１日もたってないのに誰からだろう？開けてみた

『銃弾と通帳と印鑑だ…あ、中に手紙が入ってる。』

（その銃弾は武偵弾というものの炸裂弾（グレネード）、閃光弾（フラッシュ）、燃焼弾（フレア）じゃ、一つだけでもかなり高いから大事にするんじゃぞ。後その通帳には２０００万入ってるからそれも大事に使うんじゃぞ。ｂｙ神様）

『……２０００万って遊んで暮らせる額じゃないか。』

「２０００万だと！そんな金どこででてに入れたんだよ」キンジ君が聞こえたらしく言ってきた

『さあ？どうやったんだろうねえ？そんなことよりねえこの銃弾ってどんな威力あるの？』キンジ君に銃弾の詰め合わせを見せた

「なっそれ武偵弾じゃねえかよ。一般高からの転校生なのになんでそんな物騒なもんもってんだよ」

『キンジ君どれが炸裂弾で閃光弾で燃焼弾なのか教えてよ』キンジ君がため息をついてこっちに来た

「キンジでいい。えーと、これが炸裂弾、閃光弾、燃焼弾だ。」

『キンジは物知りだねぇ』

「俺も強襲科(アサルト)の時にサンプルを見ただけだ。このくらい武偵ならみんな知ってる」

『へー僕も覚えないとね』そのあと僕は神様に渡された書類に書かれている銃の整備というのをやった

「お前それパイファー・ツェリスカじゃねえかなんでそんなもん使ってんだよ。」

キンジが驚いた目で見てきた。この銃ってそんなに有名なのかな

『えーと、威力が高いから使ってるんだよ』キンジがやっぱりかと呟いていた

「球磨川お前、その銃撃ってみたか?それすごい反動あるんだぞ」

『今朝に変な乗り物に向かって撃ったよ』キンジがまたしても驚いていた

「そういえば今朝に体育倉庫に逃げてきてたな銃を撃ちながら」

ピンポーン、キンジがいってる途中にチャイムが鳴った

「その時に肩壊さなかったのか?」キンジがチャイムを無視していってきた。

『うん大丈夫だったよ（反動を虚構（なかったこと）したから）』

ピポピンポーン、またチャイムが鳴った。

「人は見た目によらないってお前のようなヤツに言うんだろうな」

ピポピポピポピポピポピポピポピポピポピンポーン、また鳴った。さすがにキンジも限界らしく玄関に行った。キンジがドアを開けるとピンクのツインテールをしたアリアちゃんがいた

「遅い！次はチャイムならして十秒以内に出ること！」キンジが怒られていた。

「トランク運んどきなさい」

「ねえトイレどこ？」キンジが発言するよりも早く見つけて入った。

そしてキンジがこちらを手伝ってくれといってるような視線で見てきたから

『まだ整備の途中だし、僕には言われてないから手伝わないよ』と言った。

そしてキンジがトランクを中に入れ、僕は整備が終えて

『ねえアリアちゃん何しに来たと思う？』と聞いてみた

「全くわからん」キンジがそう言ってからアリアちゃんが出てきてこちらに来て

「アンタもいたの？なら探す手間が省けたわ。キンジ、禊アンタたちドレイになりなさい」

そうアリアちゃんが言った。

第三弾　～アリア来襲～（後書き）

それでは塾にいってきます

第四弾　～ジャンプは週刊が一番～（前書き）

まさかの今日二話目！正直作者は週刊もスクエアも読みます

第四弾　～ジャンプは週刊が一番～

第四弾　～ジャンプは週刊が一番～

『アリアちゃん、キチガイって君のためにある言葉だと思うんだ～』

「なんでそうなるのよ！」うわっもしかして怒ってるのかな？

『だっていきなり来て、ドレイになりなさい！ってかなり頭がいってると思うんだ～』

「球磨川の言う通りだ。なんだよドレイって」キンジが聞いた。

「強襲科（アサルト）であたしのパーティーに入ることよ！別に頭がいってなんかないわ！禊、アンタはまだ学科決めてないんでしょうから文句はないでしょ！」

『いや、まだ決めてないけど強襲科に入ろうとも思ってないよ』

「俺は強襲科（アサルト）が嫌になったから探偵科（インケスタ）に転科したんだぞ、あんな狂ったとこ何て誰が好き好んでいくものか！強襲科になんてならないから帰れ」

「そのうちね」アリアちゃんが答えた。わかったこの娘B型だ

「そのうちねっていつだよ」「アンタたちが強襲科に入ると言うまで」キンジの疑問にアリアちゃんが答えた

「もし嫌だと言うならーー」

「嫌だと言ったらどうすんだよ。言ってみろ」

「言わないなら、泊まってくから」アリアちゃんが確かにそう答えた

『ごめんアリアちゃんさっきキチガイって言ったけど訂正するよ。君はキチガイはキチガイでもマジキチだったよ。』

「なによマジキチって？泊まってくって言ったら泊まってく！長期戦も想定済みなんだから」

玄関にあるトランクを指差していった。なるほど、あれに着替えとかはいってるのかキンジも気づいてから放置してくれたらよかったのに

「出てけ！」その言葉をまさかのアリアちゃんが言った。

「なんで俺たちが出ていかなくちゃならない！ここはお前の部屋か！」

「分からず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」

アリアちゃんは犬歯をむいた。そこで僕は

『キンジ、諦めよう。この娘マジキチの自己中だからしょうがない。下にあったコンビニで一緒にジャ〇プを読んでおこう。まだ今週読んでないんだよ。』そう言ってから一緒に部屋から出ていった。

『いやー、初めてマジキチってのを見たよ。あれは一緒にいるとさ

すがにうざいね。』

僕がＯＮＥ　○ＩＥＣＥを読みながら言った。

「俺はマジキチって使ったのをはじめて見たよ」キンジはジャンプス○エアを読んでた。

『なんでスク○ア読むんだよ。ジャ○プを読めよ。やっぱりあれなの、ＴｏＬｏｖｅるダー○ネスがいいの』

「ちげーよ。ギャグ○ンガ日和と青○クがいいんだよＴｏＬｏｖｅるダーク○ス何て読んでねぇよ」

『うるさい、○クエア派。スクエ○何てジャン○のおまけだ』

「別にスクエ○派じゃねぇよ。週刊も読むよ」

『なんだよ。両方って邪道だよ。ってことはどうせマガ○ン、サ○デー、チャ○ピオンとか読んでるんだろ。』

「もうわかったよ。そろそろ戻ろうぜ」話を切り上げるように言ってきた。

『ＮＡＲ○ＴＯ読んだら行くから先行ってていいよ』途中でやめるなんて嫌だったから言った

「わかった先に行っとくよ」

『気をつけてね』そう言ってからキンジがコンビニから出ていった。

そのあとＮ〇ＲＵＴＯを読み終わってＢＬＥ〇ＣＨ　を読み始めた。

『最近ＢＬ〇ＡＣＨ調子悪いなぁ』そう呟いた

第四弾　～ジャンプは週刊が一番～（後書き）

アリアがお腹減ったというのは飛ばしました。

理由は球磨川さんが何を食べるかわからないからです。別にキンジに買ってきてもらうってのもよかったけど何買えばいいかわからなかったのでやめました。

アリアちゃんというのは球磨川さんがアリアとか言ったら変だからです。

変な点があれば教えて下さい

第五弾　～悪夢～

第五弾　～悪夢～

結局僕はジャ○プを最後まで読んでから部屋に戻った。途中できれいな女の子とすれちがった。

（ここって男子寮だったんじゃなかったっけ？）そう考えながら部屋に向かって歩いた。

『キンジどうしたの？』キンジが倒れてたから声をかけてみた。

「こいつが変なことした罰よ！」風呂から上がったからか顔の赤い、パジャマ姿のアリアちゃんが言った

『だから気をつけてねって言ったのに。あ、キンジ先にシャワー浴びとくよ』そう言って風呂場に行った。

シャワーを浴びてから、キンジも風呂に入った。

『アリアちゃんはなんで僕なんかにパーティーに入れって言ったの？』興味があったから聞いてみた。

「アリアちゃんってやめなさい。あんたのあのマジック銃弾が見えてるからできてると思ったからよ」

『僕は一般高からの転校生だよ。見えてるわけないじゃん。』

「じゃあどうやったのよ。銃弾が当たって血が出てたのに傷なんかないし、転校生だから超能力者って訳でもないし。アンタ何者よ」

『ただの転校生だよ。』キンジが上がってきた。

『もう眠いし寝るよ。キンジ僕ソファーで寝るから。おやすみ～』そう言ってソファーで寝転がった

「ああ、おやすみ」キンジが返事してきた。

「ちょっと、話そらさないで！」アリアちゃんが言った

『また明日にでも調べたらいいじゃないか僕が何なのか。どうやったのかも』そう言ってから寝た。

夢の中

「おい球磨川禊起きんか」

『うーん、お母さん後五分』

「またそのくだりをする気か！」

『なんだよ自称神様（笑）今就寝中なんだろ。夢にまで出てきて何がしたいの？』

「自称じゃないって自称何て言うとやった２０００万と武偵弾を返

してもらうぞ」

『神様のくせにおどすの？酷いなぁ』

「そういうつもりじゃないんじゃよ。その反応ってことは届いたんじゃな。それは勝手に使ってもいいけどもうやらんから大切に使うんじゃぞ」

『それだけ？じゃあ楽しい夢に変えてよ。』

「嫌じゃ変えん。なぜならそっちの世界じゃともう朝の七時じゃからのもう主は起きるんじゃ。」

『え、ほんとに？神様に会うだけでそんなに時間がたっちゃうの？そんなの悪夢じゃないか』

「じゃあ起きるんじゃ！」そう言ってからハンマーで頭を殴られて目の前が真っ暗になった。

そうして僕は悪夢を見てから起きた。

第五弾　～悪夢～（後書き）

すいません。もうサブタイが思い浮かばないので適当につけちゃいました。

もう一度言います。すいませんm（＿＿）m

毎度毎度ながら変な点があれば教えて下さいm（＿＿）m

第六弾　～朝の出来事～（前書き）

サブタイが思い浮かばねええええええ

第六弾　～朝の出来事～

第六弾　～朝の出来事～

僕が起きたときは、ちょうどアリアちゃんがキンジを起こすつもりで暴力を振るっていた

「バカキンジ！ほら起きなさい！」バカキンジってｗｗ

「はにふんだ。ほの」訳をすると多分なにすんだ。このだと思う

「朝御飯出しなさいよ！」たしかにお腹減ったなぁ

「し……る……か！」え！？朝御飯ってないの！？

「お腹すくじゃない！」「すかせこのバカ」「バカですってキンジの分際で」とか言ってる間に僕は空腹を虚構（なかったこと）にした。

「ミソギ！アンタも起きてるならなにか言いなさい！朝御飯がないのよ！」

『僕は別にお腹なんて減ってないよ』

「嘘言わないで！昨日何も食べなかったじゃないの」いや空腹を虚構したし……

「ほら球磨川も腹減ってないって言ってんだろ！」キンジがアリアちゃんに殴って来るのをよけながら言った。

「アリア！登校時間ずらすぞ。お前先に出ろ。」ああ、たしかにアリアちゃんは女子だから一緒に出ちゃまずいよね。

「やだ！逃がすものか！キンジ達はあたしのドレイだ！」アリアちゃんがキンジの腕にしがみついた。

『じゃあ僕先に出とくよ。キンジ後のことは任せた。』そう言ってバス停に向かった。

しばらくしてキンジがアリアちゃんを引きずってバス停に来た。

『キンジもよく付き合ってられるなぁ。感心するよ。

「別に好きで付き合ってる訳じゃない。くそあの疫病神め！」

こうして朝を過ごした

第六弾　～朝の出来事～（後書き）

少な目ですが許してくださいｍ（＿）ｍ

おかしいところがあれば教えてくださいｍ（＿）ｍ

第七弾　～猫探し～（前書き）

やはり球磨川さんらしさがないです。

第七弾　～猫探し～

第七弾　～猫探し～

学校で普通に授業を受けて五時間目の専門科目の時間になった。

『キンジってこの時間はなにするの？』僕がたずねてみた。

「校外でする依頼をしながらアリア対策を練る。球磨川はなにするんだ？」

『僕は先生にどの学科にするか見学でもして決めろとか言われたから探偵科（インケスタ）でも見学するよ』

「そうか、じゃあ一緒に専門棟にいくか」そう言ってキンジと専門棟に依頼（クエスト）を受けに行った

『ねえ、武偵高がどんなことがあるのか教えてよ』歩いている途中に聞いた

「ああ、そうか転校してきたから知らないのか」

そうして武偵憲章のような基本的なことから始まり、行事なども教えてもらった。そして探偵科の専門棟についた

「ここが探偵科の専門棟だ。じゃあ俺は依頼受けにいってくるから、適当に見学しといてくれ」

『うんわかった。』

しばらく適当に見学しといたらキンジが来た

『キンジは依頼ってどんなのを受けるの？』

「俺はEランクだからそれに似合う依頼を受けたよ」

『じゃあ僕もやるよ』

「ああ、助かる」そうして僕たちは専門棟からでた。その直後

「キーンジ」最近の最も会いたくないランキング一位のアリアちゃんが来た。

「なんで……お前がここにいるんだよ……」キンジが残念そうに言った。いや実際に残念なのだろう

「あんたたち二人がここにいるからよ」

「答えになってないだろ強襲科（アサルト）の授業サボっていいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位揃えてるもんね」アッカンベーをしていた。

「あんた普段どんな依頼してるのよ？」「Eランクにお似合いの簡単な依頼だよ」

『そういやなんでキンジはEランクなの？』

「1年3学期の期末を受けなかったからだよ。ていうかランクなんてどうでもいいんだけどな」

「ランクなんてどうでもいいから今日受けた依頼を教えなさい」

「お前に教える義務はない」「風穴開けられたいの？」「猫探しだよ」

「ふーんで、あんたは？」

『僕はただの見学だよ。なにもするつもりなんてないよ。』

「球磨川、行くぞ」キンジがアリアちゃんから逃げるように歩いた。するとアリアちゃんもついてきた

「ついてくるな」「いいから、あんたの武偵活動を見せなさい」

「断る。ついてくるな」「そんなにあたしが嫌い？」「大っ嫌いだ。ついてくるな」

「もっぺんいったら風穴」暴君だなあ

『猫探しってどうやるの？専用の道具とかあるの？』

「ない、しらみつぶしに歩くだけだ」え、探偵科って名前だけ！？

「ていうか、お腹減った」さっき食べたばっかりなのに燃費悪いな

「なにかおごって」

『キンジ、ちょうどいいからそこの銀行でお金下ろしてくるよ』

「わかった。球磨川はなにかいるか？」

『うーん、別に要らないや』そう言ってから銀行へお金を下ろしにいった。

戻ってきたら「この変態」とか言われて殴られている頃だった。

その後猫探しを続行すると水辺に猫がいた。それをキンジが捕まえるために行った。

『キンジ、猫にいやがられてるよ』

「これは怯えてるだけだ問題ない。あと少し……届いた」キンジが猫を捕まえた。やはり嫌がられているようで逃げようとしていた。

その後、専門棟に戻ったら僕はなにもしてないのに報酬と単位をもらった。

第七弾　～猫探し～（後書き）

やっとここまで来た。あと少しでハイジャックまで行ける……

第八弾　～口論～（前書き）

今回からキンジのことはキンジちゃんと言います。

ちなみに武藤は武藤ちゃん、不知火は不知火ちゃん、白雪は白雪ちゃんです。

第八弾　～口論～

第八弾　～口論～

猫探しの次の日の夜

「さすが貴族様。身だしなみにもお気を遣ってらっしゃる」

そう言ってとうとうキンジちゃんがアリアちゃんに牙を向けた。

『キンジちゃん、貴族ってアリアちゃんが貴族なの？』

「ああ、そのようだ。しかも一人も犯人を取り逃がしたことないらしい」

「あたしのこと調べたわね。でも、この前一人逃げられたわ」

「凄いヤツもいたもんだな。誰を逃がした？」

「あんたよ」そういった瞬間キンジちゃんが飲み物を吹き出していた。

『キンジちゃんって犯罪者だったの？』

「いや、違う球磨川俺は犯罪者じゃない。なんでカウントされてんだよ！」

「あたしに強猥したじゃない」

「あれは不可抗力って言ってんだろ！」

「うるさい、うるさい。とにかくあんたたちならあたしの奴隷になれるかもしれないのよ。強襲科（アサルト）に戻りなさい！」

『ねえ、その奴隷ってちゃんとパーティーって言うことはできないの？』

「俺はEランクだぞ。はい残念でした。他を当たれ！」

「嘘よ！入学した時Sランクだったじゃないの」

『え、キンジちゃんってSランクだったの？』

「あれはまぐれだ。とにかく今は無理だ」

「今はってことは何かすればいいのね。手伝ってあげるから教えなさい」

「一回だけだぞ。一回だけ強襲科に戻ってやる。ただし組むのは一度だけだ。そして一件だけ事件をやってやる」キンジちゃんが白旗をあげた。

「で、あんたは？」僕の方を向いていってきた。

『うーん、キンジちゃんが戻るなら僕も行くよ。体験ってことで』

「決まりねその一件であんたたちの実力を見るわ」

「全力でやるのよ」

「ああ、全力でやってやるよ」キンジちゃんが悪意に満ちた顔で言っている

『まあ、頑張るよ』

そう言ってからアリアちゃんは自分のうちに帰った。

『キンジちゃん、なんで戻る気になったの？』

「その一件でアリアを失望させるためだ。」

第八弾　～口論～（後書き）

少な目です。すみません

第九弾　～強襲科～（前書き）

もう球磨川さんに似ていないので、球磨川さんの皮を被って真似しようと必死な誰かでいいです。
っていうかそう思ってくれた方が都合上いいです。

第九弾　～強襲科～

第九弾　～強襲科～

次の日、授業が終わってキンジちゃんと共に強襲科（アサルト）に行った。

『キンジちゃん、なんでここが『明日無き学科』って言われてるの？』

「この学科の卒業時生存率が９７．１％だからだ。つまりこの学科の生徒の１００人に３人死ぬってことだ」

「おーキンジ！お前は絶対帰ってくるって信じてたぜ。さあここで一秒でも早く死ね」

このような失礼なことを言いながらこっちに人が集まってきた。それを一つ一つ丁寧に返していた。

『キンジちゃん、なんで死ね死ね言われてるの？そんなに嫌われてたの？』

「ちがう。ここでは死ね死ね言うのが挨拶なんだよ」

「えーと、球磨川だったっけか。お前もここに死にに来たのか。さあ早く死ぬんだ。」

『えーと、三上ちゃん？君こそ早く死になよ。どうせモブキャラだろ。だから死んだ方がいいぜ』

「ぐふっ、なかなか言うなぁ。モブキャラだろって、心が折れそうな言葉だぜ」

『本心を言っただけだよ。三上ちゃんってモブキャラっぽいだろ？』

「こ、これ以上言わないでくれ。これ以上は心が折れる」

『これくらいで心が折れるって、やっぱり君はモブキャラだよ』

パキッ、三上ちゃんの何かがおれる音がした。

「球磨川、さすがにモブキャラって言い過ぎだと思うぞ」

「どうせ俺なんてモブキャラだ。どうせ俺なんて、どうせ俺なんて」

三上ちゃんが泣気ながら言っている

「ほら、三上の心が折れてるじゃねえか。本当のことだがモブキャラって言い過ぎだと思うぞ。せめて脇役とかにしろ。」

キンジちゃんが言っている間にみんなが

「やめてあげて、もう三上くんのライフは0よ」とか言っていた。

『キンジちゃんって案外Sだね。ビックリしたよ』

「お前に言われたくねえ。ってか俺はなにもいってないぞ。ってなんだみんなその冷たい視線は？俺はなにもやってない」

その後、三上ちゃんはよりいっそうキンジちゃんにきついことを言

われて、ダウンした。

全員を再起不能にするまでキンジちゃんが責めてしまった。みんなが三上ちゃんウィルスに感染したかのようにダウンしている。

『キンジちゃん、さすがに言い過ぎだと思うよ』

「俺はお前が言ってる言葉があまりに酷すぎるからフォローをしただけだ」

『そのフォローって、僕が村上ちゃんに年増が好きそうな顔してるね。って言ったら、違う村上は6～12歳が大好きなロリコンだ！とか言ったやつ？』

「ああ、あれじゃあ村上の心も折れそうだったからな」

『キンジちゃんの発言に村上ちゃんは心が折れたんだぜ』

「そ…そんな……バカな……まさか俺がこんな地獄絵図を作っちまったのか……蘭豹が来る前に逃げるぞ」

『その蘭豹ちゃんってやつの心も折ろうぜ』

「バカ野郎あんなやつの心なんて折れるわけないだろ」

そう言ってから僕とキンジちゃんは強襲科の外に出た

第九弾　～強襲科～（後書き）

前書きにも書きましたが、球磨川さんの皮を被った真似しようと必死な誰かです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2526z/

緋弾のアリア～負完全な転生者～

2011年12月19日02時52分発行